

## みんなの童話

# あしたになれば

まちはずれに、赤いポストが立っていました。

「あああ、きょうも一日手紙がこなかったなあ」

ポストは、さみしそうにひとり話しをしていました。

「さいきん、人もあまり通らなくなつた。いまは、けいたいとかで、画像なんて送れるって聞いたし」

「ゆっくりあくびをすると、ずんぐりしたしせいで、うとうとしはじめました。」

「カカア、カア。またポストたらつ、日長一日手紙をまっていたのかなあ」

夕焼け雲にせかされて、山のねぐらに帰る途中のカラスが、ポストのまわりをひとめぐりしました。

一年でいちばん寒いこのきせつは、日が短く、もう夕日のあたらなくなつたところから、暗くなりかけていました。



「なあ、ポスト。またねてるのかよ。よくねるやつになつちまつたなあ」

ポストは、つめたい風に、からだをふるわせると、

「むつ、だ、だれだ。わたしのことをよくねるやつなんていうのは！」

「おおきく目をあけて、あたりを探しました。」

すると、カラスがいつぴきポストの肩にとまっていました。

「ぼくじゃないよ。よくねるやつなんていつてないよ」

カラスは、あわてて、ちがうちがうと羽をふつて答えました。

「ポストは、思いつき息をすいこむと、さげました。」

「えーっ、いつたいだれなんだ。いつもねているみたいになんて」

そのときです。ピューッと風が、ポストのまわりを走りました。

「ねてしまつたら、手紙がきても、わからんだろ」

「えっ、か・ぜ・さん？」

ポストは、キョロキョロつと、目をしばたきました。

「ああ、わたしはきせつ風の風さ。春には春の顔。夏には、てりつけるひでりを、そつと、やわらげてあげたでしょ。いまは冬のつめたい北風だ」

風は、枯れ葉をまきあげて、ポストのほほをつつきました。

「ややっ、さむくなつてしまつ」

「ポストが、ふくれつつらで、ぷりぷりおこりました。」

肩に止まつているカラスも風にあおられて、羽をバタバタさせました。

「なんだか、たいくつそうだから、ね。きょうも、手紙がこなかったのかな」

風は、ポストの顔をのぞきこみました。

「このごろでは、たつきゅうびんとかメールびんとか、あるから」

「ポストが、がっくりと肩を落としました。すると、

「ああ、ぼくも、駅前の商店街で、バイクびんというのぼりを見たよ」

カラスも思い出して、いつしよにしょんぼりしました。

「パソコンでチャットとかいうのがあつて、いつしよにしゃべれるって聞いた。だんだん手紙が、変わつてしまつたな」

「ポストは、だんだん小さな声になつてしまいました。」

「そう。でも、伝えたいきもちも、きつといまもいつしよだよ」

風は、はげますようにいきました。

「むかしの人は、すみをすつて、筆で書いていたんだけどなあ」

「ポストはふと、鼻につきつとくるすみのおいを、思い出しました。」

カラスは、スミールといって鼻をつまんで、首を横にふりました。

「・・・そうそう、まき紙なんてつかつてき。線なんてない、ただのか・み・だつた」

「ポストは、空を見上げて、なつかしそうなほほえみしました。」

「そうかあ。でも、まだ北風がつかたいから、うちのなかで、じっくり考えて、心のこもつた手紙を書くんじゃないの」

風は、ポストの肩をやわらかい風でつつみました。

「心のこもつた手紙？」

「ああ。これからは、わたしがあたたかくなる風を吹かせるから、きつと春の便りがふえるよ。いつしよにまつていようよ。あしたになれば、ね」

「ポストは、風のことばに、ほんわかあつたかい気分になりました。」

「早く春の便りが来るといいなあ」

カラスもうれしそうに言いました。

しかし、ポストは、さきほどから背中にはってある白い紙が、気になつてしょうがありませんでした。

紙には、きねん写真にいかがですか、レトロなポストです」と、書いてあつたのでした。

しろやま会員 かど まさこ